夏目漱石『行人』論ノート

*浅田　隆

1

自分が東京を立つ前に、母の持つてゐた、或場末の地面が、新たに電車の布設される通り路に当るとかで其前側を幾坪か買ひ上られると聞いたとき、自分は母に「ぢや其金で此夏みんなを連れて旅行なさい」と勧めて、「また二郎さんのお株が始まつた」と笑はれた事がある。母はかねてから、若し機会があつたら京大阪を見たいと云つてゐたが、或は其金が手に入つた所へ、岡田から勧誘があつたため、欺う大袈裟な計画になつたのではなからうか　（兄一）

右は『行人』[1]の「兄」の冒頭に近い一節である。お貞さんの縁談のつめをするとともに、大阪で友人三沢と落ち合い「高野登り」（友達一）をする予定であった長野二郎は、三沢のあいにくの発病のため、大阪帯在が長引いてしまった。そこへ予想もしなかった母と兄一郎夫婦が東京からやって来たのである。右はそのことについての二郎の感想である。それに続く形で「自分はいくらお貞さんが母のお気に入りだつて、其為に彼女がわざ〳〵大阪三界迄出て来る筈がないと思つた」と記されている。二郎の父の世話で大阪の保険会社に就職し、二郎の両親の口利きで結婚した岡田同様、長野家の親戚すじにあたる仲働きのお貞さんと「岡田と同じ会社へ出る若い人」（友達七）佐野との縁談が進行中で、東京を出る折二郎は母からその件について用件を託されており、彼は岡田夫婦同席のもとに浜寺の料理店で佐野との会見も済ませ、すでにその報告も手紙で通知済みであった。だから、縁談に関してわざわざ「母が大阪三界迄出て来る」必然性が認められず、二郎は驚いているのである。母もまた、

実はあの事があるので、丁度好い折だから、今度伴れて来ようと思つて仕度までさせた所が、生憎お腹が悪くなつてね。残念なことをしましたよ。　（兄二）

と言っているように、母の一行が大阪に来たのはお貞さんの縁談のためでないことは明らかである。二郎も、

本来なら父と母と一所に来るとか、兄と嫂丈が連立つて避暑に出掛けるとか、もし又お貞さんの結婚問題が目的なら、当人の病気が癒るのを待つて、母なり父なりが連れて来て、早く事を片付けてしまふとか、自然の予定は二通りも三通りもあつた。それが斯う変な形になつて現れたのは何ういふ訳だか、　（兄五）

と不審を抱くのである。そして漱石は右の二郎の思いに追い打ちをかけるかの如く「母は又それを胸の中に畳込んでゐるといふ風に見えた。

*国文学研究室（昭和63年9月30日受理）

母ばかりではない、兄夫婦も其処に気が付いてゐるらしい所もあつた」（同五）と思わせぶりである。作中にはこのことについて直接的な説明はないが、ある程度この母の思わくを読み取ることが可能である。「未だにしつくり反が合はずに居る」（兄十四）一郎夫婦を日常生活から旅という非日常性の中につれ出し、何とか気分転換をはからせたいという親心なのであり、母は書斎に引きこもりがちな一郎の引き出し役として、岡田の勧誘に乗ってみせたということになろう。したがって、この旅は旅先自体にこれといった用事もない行楽の旅ということになる。

さて、この『行人』は所謂「二郎説話」と呼ばれる問題や「塵労」と他の部分との構想上の問題、さらに「絶対即相対」（塵労四十四）という言葉の解釈など多くの問題を抱えているわけだが、それらの問題を考えようとするとき、作中に設定された長野家の家庭の様子を少し詳しく見ておかねばならないだろう。

小稿冒頭に掲げた二つの引用文は『行人』の背景に広がる世相を見せてくれる。今さら言うまでもないが、江戸が東京となり新しい文物は怒濤の如く押し寄せ、江戸は東京として激しい変貌を続けて来た。この変貌はまた東京に限らず、何らかの形で日本全土を席巻し、漱石が言う内発的・外発的、あるいは「皮相上滑り」であると否とにかかわらず、開化の波は人々をして「時々に押され刻々に押され」（「現代日本の開化」明44・11・10『朝日講演集』）ざるを得ない状況に追いやった。東海道も明治二十二（一八八九）年七月には鉄道が全線開通し、片道二十時間程度で大阪・東京間を結んでしまった。さらに漱石が大阪朝日新聞社の講演のために関西入りした明治四十四（一九一一）年には片道十二時間に短縮されているのである。しかし列車が走り時間の短縮がなされたにせよ、東京に住む長野家の旧弊な母にとっては依然大阪は「三界」の地であり、はるかな僻遠の地にすぎなかった。にもかかわらず、母がその三界の地に兄夫婦を伴って突然現われたのだから、二郎は驚かされるのである。

先に見たようにこの一行の目的がお貞さんの縁談のためでないことは明らかで、母は用件を持たず、行楽として出向いているわけである。そしてこの母の行楽を可能にした経済的な背景として、それまで場末の地として省みられなかった地面が「電車の布設」で「幾坪か買い上げられ」、その入金があったのかも知れないということになる。ここには東京の変貌・都市の秩序の組み替えが暗示されていると言えはすまいか。電車[2]が走ることでこれ以後、場末が表の街となり、都市の旧秩序の中での表がやがて裏の場末に転落することも予想されるのである。そのように都市としての東京は目まぐるしく変化し、その変化の中でお伊勢詣りの伊勢よりも遠い大阪三界への行楽（商用でも信仰でもない消費としての旅行）を可能にする価値観が醸成されてもいるのである。それは「現代日本の開化」の言葉で言えば、「道学者は倫理的の立場から始終奢侈を戒め」て来たが、それが「自然の大勢に反した訓戒」となってしまったということになる。

都市の変貌はこの電車のみでなく、例えば「其処へ住まふと何か祟があるといふ昔からの言ひ伝へで、此間迄空地になつてゐた」「桐畠でさへ立派な家が建つ時節」（塵労十）という辺りにもうかがえる。つまり、従来の禁忌を無視する一種の合理性、世相を動かす精神構造の変化として見ることができるのである。このように都市の秩序や精神構造が変化する中で、家庭の秩序もまた変貌をしいられるのであり、作中の長野家の秩序も今、揺れ動いている。

「でも貞丈でも極つて呉れるとお母さんは大変楽な心持がするよ。後は重ばかりだからね」

「是もお父さんの御蔭さ」と兄は答へた。其時兄の唇に薄い皮肉の影が動いたのを、母は気がつかなかつた。

「全くお父さんの御蔭に違ないよ。岡田が今あゝ遣つてるのと同じ事さ」と母は大分満足な体に見えた。

憐れな母は父が今でも社会的に昔通りの勢力を有つてゐると許り信じてゐた。兄は兄丈に、社会から退隠したと同様の今の父に、其半分の影響さへ六づかしいと云ふ事を見破つてゐた。（兄五）

右のように父は退隠の身で社会的影響力も弱まり、「帰ってから」（三十四）にも、母のお気に入りのお貞さんの結婚でありながら質素に切りつめねばならない家計の内情の変化が描かれている。岡田の妻お兼が「父が勤めてゐたある官省の属官の娘」（友達二）とあることから、父の職業については具体的に示されていないものの、国家官僚であったらしいことはうかがえる。しかし父はすでに退隠の身である。そして今も「知合間の往来」は盛んながら「始終顔を出す人に、夫程有名な人も勢力家も見えな」（帰ってから十一）い。客すじから見ると高級官僚であったようだが、今では余生を楽しむ者同志の交際と見うけられる。そしてこの明治の第一世代としての父と一郎・二郎といった若い世代とが同じ屋根の下に暮らしているのである。「帰ってから」（四）には、

父は常に我々とは懸け隔つた奥の二間を専領してゐた。（中略）従つて我々は「おい一郎」とか「おいお重」とか云つて、わざわざ其処へ呼び出されたものであつた。

と見えるが、ここには家庭の様相が象徴的に描かれているようである。長野家の間取り[3]は具体的に示されていないものの、若い世代の居住空間から隔った所、廊下を兼ねていると覚しい「縁側」（帰ってから十一）に沿って父は籠り、父は社会的な退隠とともに家庭的にも城を長男一郎に開け渡したという構図である。さらに間取りの構図から見ると、母と若い世代が住む「縁側」のこちら側では、一郎の書斎だけが二階にあり、一郎の家庭内における位置を象徴するかの観さえある。先の引用にも見られたように、母だけは今も父を頼りとして若い世代の中に混って暮してはいるものの、後述のように一郎には遠慮をしており、縁側のこちらの世界は確実に新しい家長たる一郎を中心に動き始めようとしている。

2

家庭における一郎像を見て行くと、「他人の前へ出ると」「滅多に紳士の態度を崩さない」（兄六）「外では至極穏か」（塵労十五）なのに反し、他者の人格を無視してそれに気付かない矛盾に満ちており[4]、その育てられ方にも起因して家庭に君臨する姿を見ることになる。明治も四十年代[5]となり明治に育った第二世代が家長の位置につきつつある姿として、一応読むことができよう。しかしながら、ここで注意せねばならないのは、一郎は父に比べ、君臨するが家を経営する斉家の能力に欠けているということである。

一郎の横暴とも見える気むずかしさやわがままは精神の変調による場合もあろうが、「父が昔堅気で、長男に最上の権力を塗り付けるやうにして育て上げた結果」（兄二）「長男丈に何処か我儘な所を具へてゐた。自分から云ふと、普通の長男よりは、大分甘やかされて育つたとしか見えなかつた。自分許ではない、母や嫂に対しても、（中略）一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を利かずに居た」（兄六）というような育てられ方にも起因する。しかしまた一方では「機嫌買」（塵労十二）であるため「気質が女に似て陰晴常なき天候の如く変」（兄十九）るため「自分は彼を尊敬しつゝも、何処か馬鹿にし易い所のある男の様に」（同）見え、例の和歌山での一夜

によって嫂に「同情が加は」（同四十四）る以前から二郎がみくびるような軽さも持っているのである。

一郎の変人ぶり（塵労十一）が異常を呈し始めた段階で、

父と母は差し向ひになつて小さな声で何か話し合つてゐた。其様子は今しがた自分一人で家中を陽気にした賑やかな人の様子とも見えなかつた。「あゝ育てる積ぢやなかつたんだがね」といふ声が聞えた　（同十一）

如何にも兄の存在を苦にしてゐるらしく見えて、甚だ痛々しかつた。彼等（ことに母）は兄一人のために宅中の空気が湿つぽくなるのを辛いと云つた。尋常の父母以上にわが子を愛して来たといふ自信が、彼等の不平を一層濃く染めつけた。　（同十二）

と見えるように、自分達が育てておりながら、両親の力ではすでに操ることが出来ないところまで肥大した「変人」ぶりを、ただ手をこまねいて見ている以外に為すすべのない。非力な立場なのである。つまり、父は縁側の彼方の二間にかろうじて威光を保つのみで、現実生活が演じられているこちらの世界では、場末に電車が走り桐畠にまで家が建つのと同様、旧来の秩序は後退を強いられている。しかしながら長野家の場合、父の威光が通じなくなったというばかりで、一郎や二郎・お重・嫂といった若い新しい世代にその中心を移しながら、未だ家を斉める技量に乏しい一郎のために、新しい秩序は十全に形成されるにはいたっていないのである。お直はこのような長野家に、長男の妻として「親の手で植ゑ付けられた」（同四）わけである。

さて、『行人』には周知のように何組かの男女の婚姻あるいは関係のあり方が示されている。岡田とお兼、お貞と佐野、三沢と「あの女」、三沢と精神に異常を呈した娘、その娘の離縁、三沢の縁談、二郎の縁談、お重についての三沢への打診、父の友人と盲目の女あるいは二郎と三沢の入院先の美しい看護婦というように種々のケースが散りばめられており、このような男女、夫婦模様のすそ野の広がりの頂点に一郎夫婦が居り、またこれを相対化する形で両親の姿が配されてもいるのである。

岡田とお兼は岡田が母方の遠縁とは言え、もとは長野家の書生部屋の住人で、お兼は既述の如く父の下僚にあたる某省の属官の娘であり、お貞も親戚とは言え長野家に十年間「下女だか仲働だか分らない地位に甘んじた」（帰ってから三十七）女性で、佐野は岡田の下僚といった関係を見ると、三沢のために用立てる金を二郎が岡田から借りたことについて「岡田なんぞから」（兄七）と母が言ってもいるように、長野家とはかなり家格を異にしており、単純な比較は出来ないのかも知れないが、未知の男女の生活という点では、特に岡田夫婦は、やはり重要な存在と言わねばなるまい。[6]

二郎が「君とお兼さんとは大変仲が好いやうですね」（友達四）と言ってもいるように、岡田夫婦はなかなかうまく行っているようである。しかし彼らにも気がかりがあると見えて、二郎が「奥さんは何故子供が出来ないんでせう」（友達六）と言ったとき「お兼さんは急に赤い顔をし」てしまう。それを見た二郎は後悔し、後の気分として「其時はたゞお兼さんに気の毒をしたといふ心丈で、お兼さんの赤くなつた意味を知らう抔とは夢にも思はなかつた」（同）と言っている。また、酒についてお兼が「どうも後引上戸で困ります」（同四）と言い、岡田は「なに後が引ける程飲ませやしないやね」と応じた後「傍にある団扇を取つて、急に胸のあたりをはた〳〵いはせた」（同）と描かれている。この辺りには、うかつな二郎にはわからない夫婦間の、あるいは家庭内の問題もありそうである。しかし二人は、そのような雰囲気を読者には感じさせながら、二郎にはことさらに感じさせる程でない一応円満な生活を営んでいるのである。このような岡田夫婦を

見ている二郎の意識の深部には、一郎夫婦のことがあったかも知れず、佐野と会う為に出かけようとする場面で、

　お兼さんは何時の間にか箪笥の抽出を開けて、岡田の着物を取り出した。自分は岡田が何を着るか、左程気にも留めなかつたが、お兼さんの着せ具合や、帯の取つて遣り具合には、知らず〳〵注意を払つてゐたものと見えて、「二郎さんあなた仕度は好いんですか」と聞かれた時、はつと気が付いて立ち上つた。（友達八）

と見える。つまり無自覚裡に二郎はお兼と直とを比較していたかも知れず、さらにそれは「結婚してからあゝ親しく出来たら嘸幸福だらうと羨」（同五）む気分とともに、自分の将来への漠然とした思いに発展するものであったかも知れない。先に未知の男女と言ったが、岡田夫婦は一郎の父母の口利きでまとまったわけだが、それ以前からお兼は長野家に出入りしており、「互に顔を知り合つた」間柄で、長野家の食客時代から下女達に「岡田さんお兼さんが宜しく」（以上　友達二）などとからかわれてもおり、岡田自身の意志が先行していたようで、この点でも一郎夫婦と対照的である。

　お貞の縁談は現在進行中ということもあって、作中で繰り返し語られているが、具体的な細部についてはあまり描かれていない。おそらく母のお気に入りのお貞さんの縁談で、「先方があまり乗気になつて何だか剣呑だから」（友達七）二郎の関西旅行を利用して直接佐野に合わせる、というような慎重派の母であってみれば、佐野を紹介した岡田によって相応の身分や素姓の吟味が母に伝えられているものと想像される。その吟味の内容については、例えば「財産が何の位あるんだらうとか、親類に貧乏人があるだらうかとか、或は悪い病気の系統を引いてゐやしなからうかと云ふやうな事」（塵労二十七）で、母にすれば右のような吟味の上でなければ「男だつて自分勝手に無暗と進行されちや困ります」（兄五）ということになる。

　作品中に散りばめられた断片からの類推でしかないが、母の婚姻に関する応対から想像すると、直は長男の嫁ということでもあり、このような関門をくぐり抜けた末に一郎の妻として植え付けられたということになろう。また作中には描かれていないが、母もまたかつてはこのような関門をくぐり抜けた末に、長野家の嫁として親の手で植え付けられたものと思われる。にもかかわらず、母は今長野家にしっかりと根を張り、父以上に長野家を現実的・実際的に支えているのである。ここに一郎夫婦とは別な、夫婦としての父母の歴史を思わせはしないだろうか。実際的な母については、例えばお貞の縁談に際し、お重を先に片づけるべきだという父や一郎を押え、形式にとらわれず実際的に処理した（帰ってから十）のは母であり、父の固有名詞が示されていないにもかかわらず、母が「綱」（同十二）という名を与えられているのも、母が個別具体的な長野家の母であるのに比べ、父が明治の第一世代として社会を渡り、今退隠した隠居という一般的な意味しか与えられていない証左ではなかろうか。一郎に言わせれば、父は「おつちよこちよい」（帰ってから二十一）「上滑りの御上手もの」「摯実の気質がない」（同）ということかも知れないが、母綱は社交性のある夫につかえ、夫を頼りとして家を治めて来たのであり、その故に、一郎が皮肉をこめて「お父さんの御蔭さ」と言ったのにも気付かず、夫の手柄として満足そうに聞くのである。ここには夫婦として暮した年輪による落ち着きもあろうが、一方では、「立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がない」（塵労四）という嫁ぐ女の覚悟を直と同様に持つた上で、旧来の夫婦の形式に自己を押しこめ、さらに一郎にはない夫の愛嬌に助けられて出来上った関係と見ることが出来よう。和歌の浦の海岸を歩く一郎夫婦の後姿を見ながら、

そりやあの人の事だから何とも云へないがね。けれども夫婦となつた以上は、お前、いくら旦那が素つ気なくしてゐたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか。（中略）なんぼ一郎だつて直に傍へ寄つて呉れるなと頼みやしまいし　（兄十三）

と言う母の言葉には、長野家で送った母自身の姿をある程度想像させるものがあろう。そして直が自分の道具類を納めた「小さな部屋」で芳江と「二人限其処に遊んでゐる事」はいくらもなく、直は「大抵母と共に裁縫其他の手伝をして日を暮してゐた」（帰ってから二十五）とあるように、母綱もまた、直を長野家で歩んで来た自分の足どりの継承者として、主婦業の伝授をしているとも読めるのである。

3

さて、一郎夫婦についてもう少し詳しく見ておきたい。

一郎は家長として養成された人物である。そして既述のように、彼も縁側のこちら側の世界を構成する新しい世代の一人であり、妻を家の付属物とするような、人格を抜きにした遇し方が出来ない世代の一員である。その意味では「子供を生ます為に女房を貰ふ人は、天下に一人もある筈がないと、予てから思つ」（友達四）ている二郎とも近い当世風の人物と一応言えるだろう。したがって、親の手で植え付けられた妻に、形式的な夫婦であることでは満足出来ず、「霊も魂も所謂スピリットも摑」（兄二十）んでいるような人格としての交際・交流を求めないではいられない、それなりに新しい人間でもあった。[7]

二郎は一郎について「夫程疑ぐるなら一層嫂を離別したら、晴々して好からうに」（帰ってから二十八）と無責任なことを考えているが、一郎にはそのような気持ちは毛頭ないようである。むしろ後述のように、妻の愛をおそらく誰よりも強く求めていたものと思われる。直は二郎の「少し積極的にしたら何うです」という言葉に対して「御世辞を使ふの。妾御世辞は大嫌ひよ。兄さんも御嫌ひよ」（兄三十一）と言う。お世辞とは一種の人間関係における技巧と言えようが、一郎も「小刀細工」（帰ってから二十八）としての技巧を嫌い「自然が醸した恋愛」（同二十七）を尊重するのである。私見にすぎないが、「自然が醸した恋愛」にしても、表現されることがなければ恋愛は成立するはずがなく、「テレパシー」（塵労十一）などという「趣味の遺伝」（明39・1・　『帝国文学』）や「霊の感応」（小宮豊隆宛書簡　明39・11・25）への期待は、漱石の見果てぬ夢であり、現実生活に満たされない心が渇望する浪漫的観念であろう。さらに霊感に打たれる如く恋の対象を発見したと仮定しても、対象の異性に自己の心を表現する行為なしにはそれは遂に片思いに終る以外なく、表現に際しては自然な心の発露としての何らかの技巧が求められるに違いない。例えば『行人』同様に漱石の実生活が投影していると見られる『道草』（大4・6・3～9・14『朝日新聞』）の中で、家計の不如意を補塡すべく健三はアルバイトをし、その給料を「畳の上へ放り出」す場面がある。お住は「別に嬉しい顔もし」ないで受け取るのである。時間に追われる健三にとってアルバイトの給料はお住への愛の表現であったろう。しかしそれがあまりに無技巧に渡されることで物質的要求は満たされながら「精神上の要求を充たす」ことは出来なかった。お住はその「物足らなさを回復するために」、後日反物を買い晴々しく輝く顔で「あなたの着物を拵へようと思ふんですが」と言う。これを健三は「下手な技巧を交へてゐるやうに」感じ「わざと彼女の愛嬌に誘はれまい」とする。お住は「寒さうに座を立つ」のである（以上『道草』二十一）。健三が感じるような技巧がそこにあったかも知れないにしても、行為

全体によって表現されているものは、お住の健三に対する自然な何ものかであったはずである。お住の「寒さ」は『行人』の随所に見える嫂直の「淋しい片鬢」（兄六）の笑いと重なりはしないだろうか。

一郎は技巧について、

　己は自分の子供を綾成す事が出来ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄学問をした御蔭で、そんな技巧は覚える余暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする為に、何うしても必要と見えるね

（帰ってから五）

と言っている。これによって見れば、一郎の内にも技巧をめぐって迷いがあったことは確かである。一郎夫婦も健三夫婦も共に、最初にかけ違ったシャツのボタンが最後まで食い違うのに似ている。一郎と直はどこかで立ち止まり、一度かけ違ったボタンの位置まで遡らねばならないはずである。しかし人生が遡ることの出来ないものだとすれば、かけ違った部分を放棄して、あるべき姿において再出発することも出来るのである。しかし一郎には気付いていながらそれが出来ないのである。一体何故なのだろうか。

この問題を解く鍵の一つは、「帰ってから」の十三から十九にかけて、父の体験として語られる「盲目の女」のエピソードに対する、一郎の判断の中にあるのではなかろうか。

二十五、六年前のことで、長野家の父の後輩に当たる男が二十歳前後の頃、その男の家の召使が男に積極的に働きかけた結果契りを結んでしまった。その折、のぼせた男は未来の結婚を約してしまったが、一週間も経ないうちに後悔し、自分は少し学問をするつもりだから三十五、六まで妻帯出来ないので約束は取り消すと言った。女は暫くして暇を取った。爾来二十何年、男は偶然その女と同席することとなったが、女はその時盲目となっており、隣に座った男に気付くこともなかった。男は一別以来の女の人生を気にかけ、長野家の父に様子を見て来て欲しいと頼んだ。頼まれた父は女の家を訪れたが、別れぎわに、女は、男が結婚の約束をしながらすぐに取り消したのは、周囲の圧力によるものか自分が気に入らなかったからか「其有体の本当が聞きたい」と尋ねて来た。「一旦契つた人の心を確実に手に握れない」二十何年来の女の苦痛に接した父は、「夫や大丈夫、僕が受け合ふ。本人に軽薄な所は些ともないと答へた」という話である。この父の対応について客は「貴女は好い功徳を為すつた。さう云つて安心させて遣れば其眼の見えない女のために何の位嬉しかつたか」と言い、また別の客は「其処が凡べての懸合事の気転ですな。」と父をほめたのである。

少々要約が長くなってしまったが、このエピソードを兄夫婦と二郎は客と共に聞いたのである。そして後日一郎は「其女が二十何年も解らずに煩悶してゐた事を、たゞ一口に胡魔化してゐる。己はあの時、其女のために腹の中で泣いた。」「お父さんの軽薄なのに泣いたのだ」（同二十一）と父の「虚偽な自白」（同二十二）を批判するのである。一郎は二郎に言わせると「元来正直な男で、かつ己れの教育上嘘を吐かないのを、品性の一部分と心得てゐる位の男」（同十二）であり、父の「上滑りの御上手もの」（同二十一）的側面を嫌うのである。しかし二郎はこのような兄を「此学問をして、高尚になり、かつ迂濶になり過ぎた兄」（同）とも評しており、漱石が一郎的判断をしていたとは思えないが、これはおそらく誰にも解き難い課題なのではないか。真実居士としての一郎のように父の「虚偽な自白」を否定し、真実のみに突き進むのが正しいのか、あるいは方便（技巧）によって相手の人格を傷つけずにすむなら嘘も言うというのが正しいあり方なのか。た

だこの場合、常識的に過ぎるかも知れないが、父が真相を語ることで盲目の女の心が安まるということは期待出来ないということである。しかし一郎にはその辺りは慮外に置かれているようで、一郎にとって父の虚偽は人間の自然をそこなう技巧として許せないようである。

先に筆者はこのエピソードに対する一郎の判断の中に鍵の一つがあると言ったが、倫理的問題として考えた場合、自己の人格を守ろうとしているか相手の人格を守ろうとしているかという形で見ることが出来る。さらに技巧をそれ自体として見るだけで、観念的に硬直した一郎には、技巧を用いさせる相手の心の姿勢を包み込むことが出来ないのである。父はその場の座興として「滑稽を主にして、大事の真面目な方を背景に引き込まして仕舞」（同十三）ったが、父は「虚偽な自白」によって人格をそこなったとしても、その「虚偽」によって当事者二人の人格はそこなわれないですんだのである。そのような「摯実」（同二十一）から出た技巧という観念を持ち得たならば、一郎の技巧をめぐる迷いは少しは氷解するはずである。

とは言え、実際生活にあっては直の技巧に完全に籠絡される姿を見ることも出来る。「帰ってから」の冒頭で、険悪な方向への徴候を見せる兄を、直はほんの十分か十五分の間に「殆んど警戒を要しない程穏かに」させる。二郎はそのような「嫂の手腕」に敬服するのである。また愈々二郎が下宿をしょうとして一郎の書斎へ挨拶に行った場面でも、帰宅直後の兄は、嫂が芳江をつれて着がえの不断着を持って来るのを待っていた。それは「母が嫂に『斯ういふ風にお為よ』と云ひ付けた」（帰ってから二十六）結果習慣となった一つの形式であった。しかし彼は「和服の不断着より、嫂と芳江とを」（同）待っていたのである。一郎と二郎は次第に険悪な雰囲気となる。兄は二郎と直の関係をダンテの『神曲』に描かれたパオロとフランチェスカの「自然が醸した恋愛」に擬し、自己を敗北者だと言う。一郎の猜疑心はそこまで肥大し、二郎は兄の精神状態を疑うのである。そこへ嫂が芳江と共に上って来る。兄弟の間にわだかまっていた息づまる危機は、母に教えられた嫂の形式的な言動によって去る。二郎はその折の嫂を、「自分は永らくの間、嫂が兄に対して是程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らなかつた」（同二十八）と評している。確かにこの折の直は愛嬌に満ちている。しかし日頃の直からすれば、逆に意識的な技巧ということになって来はすまいか。このように観念としては技巧を嫌忌しながら、実際には技巧によって簡単に籠絡される矛盾に満ちた一郎を、漱石は描いて見せているのである。

右のような直について、母はある時「一体お直の気立は好いのかね悪いのかね」（同三十八）と尋ねる。母の直に対する疑問は今に始まったことではなく、和歌の浦の海岸を歩く母の口からも聞かれるのである。「一体直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同なじ調子だがね。二郎、御前にだつて左右だらう」（兄十四）と言う。つまり夫に対してのみ「つらあてがましく遣つてゐる」（同）のではないかということである。この母の観察は現象的には一応正しいと言わねばなるまい。二郎も「腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あつた」（同）と言っているのである。しかし二郎はそうした現象の背後にある彼女の人格から、

彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を与へると、温め得る女であつた。持つて生まれた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女（兄十四）

と見、「矯め難い不親切や残酷心はまさかにあるまいと信じてゐ」（同）るのである。そして二郎によれば、兄もまた直と同じ「気質を多量に具へてゐた」ため、「同じ型に出来上つた此夫婦は、己れの要するも

のを、要する事の出来ないお互に対して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反が合はずに居る」（同）のだというのである。

ところで例の和歌山での嵐の夜、直は二郎に「私は是で満足です。是で沢山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない」（兄三十一）と言う。これを直の媚態とも居直りとも解釈出来るはずである。しかし後述のように、これを嫁ぐ女の断念の結果と見ることも出来るのである。一方一郎は直の愛を求め霊や魂やスピリットを手攫みにしたいと焦れるのである。元来「天然の愛嬌」を持たない直を相手に、「砂の中で狂ふ泥鰌」（兄二十一）のようにのたうつのである。

漱石はこのような夫婦の心理の葛藤を『道草』で再び執拗に追求した。お住と健三の関係をそのまま『行人』解釈にスライドさせることは出来ないが、『道草』にはつぎのような部分がある。お住は夫婦という形式的な倫理観にとらわれない女と説明されている（七十一）。そして、

「単に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふ丈の意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも学問をした健三の方は此点に於て却つて旧式であつた。自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義を実現したがりながら、夫の為にのみ存在する妻を最初から仮定して憚からなかつた。「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」と。さらにまたお住は「泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れゝば」（七十七）とも言う。お住は直に比べはるかに激烈であるような印象を持つが、直にこのような自覚があつたかどうか、漱石はお住ほどに直を語らせていないため定かではない。[8]

ところで一郎は「自然が醸した恋愛」にあこがれ何とか直の霊や魂やスピリットを手づかみにし、形式を越えた人格的交流を持った夫婦像に憧れているという意味で、新しい世代に属していると述べたが、それは彼の観念の世界に限定されており、技巧をめぐって、観念と実際とが乖離していることを指摘したのと同じく、ここでも彼の観念と実際の乖離を見ることになる。一郎も「夫の為にのみ存在する妻」を求め「妻は夫に従属すべきもの」と考えているふしがある。Hさんは二郎への手紙の中で（塵労三十八）、「鋭敏」な一郎について、

甲でも乙でも構はないといふ鈍な所がありません。必ず甲か乙かの何方かでなくては承知出来ないのです。しかも其甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、ぴたりと兄さんの思ふ坪に嵌らなければ肯はないのです。兄さんは自分が鋭敏な丈に、自分の欺うと思つた針金のやうに際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行きます。其代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで来て呉れなければ我慢しないのです。

と説明し、「唯の我儘とは違ふ」と弁護している。「塵労」における構想変更の問題の指摘もあり、[9]単純に直への要求と読むわけには行かない部分である。また同じ「塵労」（四十）にモハメッドが山を呼び寄せようとしたエピソードにからめて、「何故山の方へ歩いて行かない」というHさんの言葉に、「もし向ふが此方へ来るべき義務があつたら何うだ」「義務のない所に必要のある筈がない」と言うのである。この部分については後に再説する予定であるが、Hさんの説明では、この一郎の要求は社会全体に対する高邁な思想に根差すもののようでもある。しかしその一郎を長野家の実生活の次元に引きずり降したとき、Hさんほどに理解することの出来ない家族には、君臨し従うことのみ

を求める横暴な一郎像が見えて来るばかりなのである。そして、一方で技巧を拒みながら結果的には技巧に心を柔げ、人格としての交流を求めながら妻の人格を認めず従わせようとする、矛盾に満ちた家庭の一郎像が浮かび上って来る。

少し先走りすぎたようである。直の形象の問題にもどりたい。

嫂直を「囚はれない自由な女」と見る向きもあろうが、「自由な女」というときに連想されるような、主体を持った新しい女であったか否か疑われる。二郎は直について、

彼女は男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に来た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。　（塵労六）

と観察している。これも漱石の病気による中断（大2・4・8～9・17）後の部分に見える直像なので異論もあろうが、現に与えられている作品を完結した空間として受容するとき、右の直像はお住とは違った形象として読むことができよう。

先に嫁ぐ女の断念の結果を直に見ることが出来ると言ったが、直は親の手で長野家に植え付けられ、彼女は大抵母と共に日を暮すという形で長野家の土に根を張るべく、今長野の色に染められつつある。「囚はれない自由な女」と二郎に見えたのは、直が嫁ぐ段階でそれまでの自己の牆や壁に見切りをつけ断念した結果の姿だったのではなかろうか。このように考えない限り、

何物にも拘泥しない天真の発現
容易に己を露出しない所謂しつかりもの
或刹那には彼女は忍耐の権化
其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない気高さが潜んでゐた
彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた

このような二郎の観察した「色々に見えた」（以上いずれも塵労六）直像を、一本の糸で結ぶことは出来ないはずである。

彼女は自己の過去の一切の牆や壁を捨て、白無垢として一郎に嫁いだにもかかわらず、一郎は学問に専念するのみで斉家の努力を放棄しているのである。彼女は後述のように二郎と同じような軽やかな世代に属しながら、矛盾に満ちた夫の実現不可能な要求のために「邪」（同五十一）にされてしまったと言える。そして彼女は一郎から何も求められないまま「腑抜」となり「ことに近頃は魂の抜殻になつちまつた」（兄三十一）のである。

4

二郎は作中で「今になつて」（兄四十二）、「当時の自分には」（同四十三）という形でしばしばかつての自己を反省し、「腹の中でどつしりした何物も貯へてゐなかつた」（帰ってから八）ことを反省している。それは主として自己内部の昏迷に苦悩する一郎を理解することが出来なかったことについての反省という傾向を持っているが、確かに二郎の人生態度はとらわれない明るさと軽さを持っている。

三沢が紹介しようという娘について、三沢が差し出す珈琲や菓子をその娘が受け取ろうとしなかったのを見て「少し旧式ぢやないか。何でも遠慮さへすればそれが礼儀だと思つてるやうだね」と評し、三沢は「家庭が家庭だからな。然しあゝいふのが間違がないんだよ」と応えるのである。二郎には自分の結婚についてまだまだ実感がなく、お貞の結婚を見送った後「結婚問題を人生に於ける不幸の謎の如く考へ」（帰ってから三十六）る程度にすぎない。それに比べ、近々結婚が予定されている「つい近頃父を失つた」（同三十）一家の長男である三

沢との間には自ら立場の相違があり、右のような女性についての判断の違いも生じたのだろうが、二郎は次男として、長野家の家庭内の潤滑油的な役まわりを与えられ続けて来た人物であることも見逃せない。[10]二郎は大学卒業直後で、未だ書生気分の抜けきらない若々しい青年である。一方一郎は大学の教師として一かどの地位を得ており、「懸隔のある言葉で応対するのが例になつてゐ」（兄二）ることからも、二人の間の「年が少し違ふ」（同）というその年令差は、四、五歳程度にはとどまるまいと思われる。そして直も「是でもまだ若いのよ。貴方より余つ程下の積り」（同三十）と見えるように、直もまた一郎とは「年が少し違う」のである。

ところで、『行人』には中途半端に言い出したぎりで、それ以後に何の発展も示さないまま放置された伏線の張り忘れもしくは放棄と見られる部分が特に多い。[11]このような傾向の一つについて紅野敏郎氏は「話の中心にすこし入り出すと、『汽車』などが着き、突つこめないで、あとにまわされていく。漱石はこの手法で、読者をぐいぐいつっていく」と注解している。[12]確かに新聞連載小説の手法としては巧妙であるが、その結果、中には放置されたままの伏線が生じ、それが解決出来ない謎として読者を翻弄することも確かである。中でも、作品読解の大きな鍵であるような印象を与えながら、作中から殆んど手がかりを得ることが出来ないのが、

御母さんの前ですが、兄さんと姉さんの間ですね。あれには色々複雑な事情もあり、又僕が固から少し姉さんと知り合だつたので、御母さんにも御心配を懸けて済まない様ですけれども、大根をいふとね。兄さんが学問以外の事に時間を費すのが惜いんで、万事人任せにしておいて、何事にも手を出さずに華族然と澄ましてゐたのが悪いんですよ。いくら研究の時間が大切だつて、学校の講義が大事だつて、一生同じ所で同じ生活をしなくつちやならない吾が妻ぢやありませんか。兄さんに云はしたら又学者相応の意見もありませうけれども学者以下の我々には到底もあんな真似は出来ませんからね

（帰ってから二十）

という部分である。含みの多い言葉でありながらどのような「知り合」であったのか、何の具体性も見い出せないままに投げ出されており、一郎の猜疑心が生み出した幻かも知れない解釈――パオロとフランチェスカの関係や三沢と不幸な娘さんの関係になぞらえた解釈が、読者の目に実しやかに映りもするのである。

「僕が固から少し姉さんと知り合だつた」という言葉は、いく通りかのケースを想定させる。例えば兄の縁談の相手がたまたま二郎の知っている女性であった、あるいはもとから一郎も二郎もそれぞれに知り合いでありながら、互いにそれを知らなかった。さらに二郎の知り合いの女性が一郎の妻に選ばれた、などのケースである。伊狩章氏[13]はこの問題について、想像を交えつつ、

お直は二郎とは結婚前からの知り合いで、説明はないけれど、おそらくは二人は面識があり、何度か合い、気心も知っていた。お直は気さくで、穏やかな二郎の気心を知っていた。二人の間には、なめらかな精神的交流があった。想像が許されるなら、お直は二郎を好ましく思い、その兄だというので一郎のところへ嫁いできたのかもしれない。

と解釈している。これは先の三つのケースの第三に相当する。作中の直と二郎のあり方からの類推として、一応の妥当性はあろう。しかし、「何度か合い」「なめらかな精神的交流があった」か否かについては疑わしく、またその交流が二人をして、「自然の愛」にまで発展させるものであったかはさらに疑わしい。

作中に設定された若い人達の縁談を見ると比較的限られた交際範囲

の中から相手が求められており、[14]今日のような仲介業的な半職業的仲人の介在は見られない。この傾向からすれば、「学問以外の事」は「万事人任せ」にして適令期を過ぎようとしている一郎の配偶者として、家族の知人縁者の中から直が選ばれた。一郎には面識がなかったが、比較的社交性に富む二郎には面識があった。もう少し積極的に想像すると、おっちょこちょいの二郎は一郎の結婚当時はさらに若かったわけで、自分の知人・交際範囲の周辺にいる女性を、誰かれとなく母に教えたのかも知れない。先に引いた「夫程疑ぐるなら一層嫂を離別したら、晴々して好からうに」という思いの背後に、それ程気に入らなければ自分で気に入ったのを探してみろといった気分も感じられるのである。

少々回りくどくなったが、長野家の人間関係や家庭の様相について見て来た。既述のように、長野家の秩序は今、家長一郎を中心として動き始めるべきでありながら、一郎自身の昏迷のため核が構成されず、宙に浮いている。この不自然な家庭内に家長の妻として植え付けられた直は夫から何も与えられないまま、不安定な家庭の雰囲気の中を浮游し、今「腑抜」「魂の抜殻」として「立ち枯れ」つつあるのである。嫁ぐ女の覚悟を持って「牆も壁も」切り捨てた直の心に本来充塡されるべきものが与えられず、結局は地金としての「天然の愛嬌のない」性格によって、その日その日を送っているに過ぎないというのが直の姿の真相ではないか。二郎の目に「有り触れたしつかりものゝ域を遥に通り越してゐ」（塵労六）るように映ったのは、彼の錯覚にすぎないのである。

先に旅先のHさんから二郎に宛てた手紙に触れて、一郎の要求は社会全体に対する高邁な思想に根差すと述べた。また、その一郎を長野家の実生活の次元に引きずり降したとき、横暴な一郎像が見えて来るばかりだとも言った。ここに『行人』の一つの構造を見ることも出来る。一郎という実体は直接的には作品の表面に現われず、家庭の次元から二郎が眺め、観念空間の次元からHさんが眺めるのである。そこには当然二郎やHさんの主観的解釈があり、二郎やHさんの鏡に映る一郎像は読者にとって実像ではない。さらに漱石は過去の事柄についての回想という形をとっている。つまり、『行人』の一郎は、二段階の客体化の装置をくぐり抜けて読者の前に提出されることになる。

考えてみると、『三四郎』（明41・9・1～12・29　『朝日新聞』）に始まる三部作はいずれも現在進行しつつある時間の中で、当事者自身が姿を現わし、舞台の上で動くのである。これに比べ『彼岸過迄』（明45・1・2～4・29　『朝日新聞』）に始まる三部作は、短篇の集積という周知の共通項とともに、作品の主題を構成する当事者は他者を介して語られる傾向があり、特に『行人』と『こころ』（大3・4・20～8・11　『朝日新聞』）においては共に、他者と時間という二段階の客体化の装置が施されているのである。夙に指摘されているように、『行人』は漱石の実生活に材を得ている所が大きいようである。しかし漱石の実生活は知らない。ただ自己の心中にわだかまる「塵労」を腑分けし、客体化しようとする努力が、この二段階装置となったのではないかと思われるのである。

このように考えるとき、この作品が漱石の自己を肯定することにおいてではなく、自己否定を契機に成立しているらしいことに想到する。既に見たように「相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで来て呉れなければ我慢しない」のが一郎である。そこには自己が進む道を絶対と考える一郎が居る。その一郎は「嫁に行けば、女は夫のために邪になる」（塵労五十一）とも言う。玉井敬之氏[15]の「結婚は女を変えるかも知れないが、男も変えるのではないだろうか」との指摘が

あるように、人は相互の影響関係の中で変わるものであるにもかかわらず、自己の変化を拒む絶対としての自己認識がここにも見られるのである。そしてまた漱石は、このような自己内部に閉じこもる自我の所有者を否定することを契機として、精神を消耗しながらこの作を為したと言えるのである。

注

1、大正元（一九一二）年十二月六日から二年二月四日にかけて東京・大阪『朝日新聞』に「友達」「兄」「帰つてから」を連載したが、胃潰瘍のため中断し、「塵労」は二年九月十六日から十一月十五日にかけて掲載された。この半年近い中断期間に漱石の当初の構想が変更されたとする伊豆利彦氏の「『行人』論の前提」（昭44・3　『日本文学』）その他があるが、小稿では、現にある作品を一つの完結した空間としてとらえる立場から、読解を試みた。本文は集英社縮刷版『漱石文学全集』第七巻（昭58・3）を用いた。またこの稿は、拙稿「滑稽な一郎」（昭60・3　『鈴木弘道教授退任記念　国文学論集』　奈良大学国文学研究室発行）において一郎の客体化を試みたが、その後を受けている。

2、ここでの「電車」は明治十五年に創設された鉄道馬車が三十六年八月東京電車鉄道（東鉄）となり、その後の街鉄、外濠線などが合併して三十九年六月東京鉄道となり、さらに四十四年八月東京市が買収して成った市電を指すものと思われる。

3、部屋数は多いようである。簡単に拾ってみると、二階建で、台所や茶の間（帰つてから十一）、直の部屋（同二十五）、父の二間（同四）、下女部屋（同六）、書生部屋（友達二）、二郎の居た部屋（塵労十）、他に母の居間やお重の元の部屋もあったものと思われ、下男と覚しい平吉の居室（塵労二十六）もあったかも知れない。さらに兄の書斎は二階にあるが、これだけの一階部分からして一室ということはあるまい。

4、拙稿「滑稽な一郎」（注1）で考察した。

5、作中に設定された時間については具体的説明はないが、磯田光一氏は「明治の終末、大正の発端を飾る思想として語られていた」（『思想としての東京』　昭59・3　国文社）と言う。二郎の語りを発表時期とすれば大正元年ということになり、語られる内容は明治となる。素材面から見ると、岡田は大阪天下茶屋に住む。ここを漱石が訪れたのは明治四十二年十月十五日である。満韓旅行の帰途長谷川如是閑を訪ねたのである。この折浜寺の料理屋にも行く。また和歌山や和歌の浦については明治四十四年八月の大阪朝日新聞社の講演に際して出かけた。その折吐血（十八日）し翌日大阪の湯川胃腸病院に入院した。これが三沢の入院先として生かされている。しかしこれらは単に素材の時間にすぎない。ところで入院中の三沢が窓外を見ながら「も少しするとあの山の下を突き貫いて、奈良へ電車が通ふやうになる」（友達十三）と言う。これは今日の近畿日本鉄道奈良線だが、集英社版注釈では「明治四十三年九月設立された奈良軌道は、翌月大阪電気軌道と改称、大阪上本町・奈良間の鉄道工事に着手し、大正三年四月完成・開通させた」とある。しかし、中本宏明編『奈良の近代史年表』（昭56・2　大阪書籍）によると、当初は暗峠（くらがり）を経て奈良側に入る予定であった計画（明43・10・15決定）を、「生駒ケーブル線を隧道線に変更許可」されたのは明治四十四年三月八日で、着工が同年六月十九日である。そしてトンネルの着工は七月四日であった。つまり漱石の入院はトンネルの着工直後であり、トンネルの話題は湯川病院から生駒山が見えることもあって、大きな話題になっていたものと思われる。ただここで問題となるのは、作中に設定された二つの時間の関係である。過去を回想する現在の二郎を作品発表時の大正元年十二月とすれば、三沢の入院の夏はその前年（生駒トンネル工事中の明治四十四年）ということになろう。その間に「けれども人格の出来ていなかつた当時の自分」（兄三十三）と言うだけの人格的な急激な変化があったのか、ということになる。おまけに、一郎のHさんとの旅行は大阪旅行翌年の夏休みであり、少くともHさんの手紙を受け取る「塵労」二十八の二郎は相変わらずの人格である。では四十五

年夏から大正元年十二月までの間に自然的な、一郎を理解出来るまでの人格の成長が難かしいとすれば、彼に与えられた衝激は何だったのか。作品に描かれた世界に限定すれば、当然それはHさんによって伝えられた一郎の内面の苦悩をつぶさに知ったことである。

6、玉井敬之氏「『行人』論への一視点」（昭54・3　『人文学』）によると、岡田が住む天下茶屋は日露戦後急速に開けたところで、「郊外生活」という言葉が流行し「ここから大阪へ通勤する人が多くなった」、「岡田もまた、この『郊外生活者』の一人であった」わけで、ここにも世相の変化がうかがわれる。今日流に言えば、核家族と多世代同居家族の対照という色彩も見える。

7、一郎は直の心の内容を手摸みにすることをのみ考え、自分の心を開き直に摸ませることは考えていないようである。ここに一郎の閉された自我が見うけられる。

8、『道草』の手法との大きな違いである。『道草』は当事者相互の眼から当事者を対象化しているが、『行人』では当事者を他者が対象化するのである。ここに漱石の及び腰を見ることが出来よう。

9、伊豆利彦氏（注1）は当初の構想が変更されたことで、二郎と直の秘められた愛・無意識の愛が後退し、「塵労」との間に亀裂が生じたとするが、玉井氏（注6）は「短篇を合してひとつの長篇小説にするという」構成が踏襲されているとすれば、『行人』の各篇は「親疎の差はあっても、相対的に独立したものと見ることができる」「『友達』もまた、他の諸篇とは必ずしも有機的に関係しているとはいえず」とする。

10、二郎は家庭の中で「平生食卓を賑やかにする義務を有つてゐると迄、皆なから思はれてゐた」（帰ってから二十三）と見える。彼は食卓に限らず、座をやわらげるべく常に腐心している。また先の盲目の女についてのエピソードを語る場面で、父は「二郎面白いだろう」（同十四）とか「後の方がまだ面白い。ことに二郎の様な若い者が聞くと」（同十六）と話しかけるが、父は二郎に話しかける形をとりつつ一郎や直の注意を喚起しているのである。直接一郎に話しかけようとしないのは一郎への遠慮とともに、一郎が「一座の迷惑に」（同十九）なるような応対をする可能性もあるからで、二郎は重宝な存在でもある。

11、伏線について伊狩章氏は「『行人』の解釈について」（昭61・3　『国文学会誌』）の中で漱石の伏線技法について触れた上で、伏線は「『行人』において、ついに作中に姿を隠してしまう」と言うが、水谷昭夫氏は「『行人』の世界」（『漱石文芸の世界』昭54・4　桜楓社）で、「あたかもクロス・ワーズの鍵語のような謎めいたことばや状況が、いたる所に散嵌され」とも言う。これはおそらく伏線の放棄や失念の結果であろう。その点では伊豆氏が指摘する構想の変更説は妥当性を持つと思うが、筆者は作品の亀裂を見るよりも、作品のトータルな姿を考えたい。

12、この注解は新潮文庫版『行人』に付されたもので、兄弟が和歌山行の列車に座り三沢の縁者の気の毒な娘について一郎が話し始めた折、列車が駅に着いて中断されることについて注したもの。ただこの三沢の気の毒な娘については後に詳しく述べられている。

13、注11に同じ。

14、縁談を列挙すると、三沢の許婚者の友人と二郎、二郎の妹お重と二郎の友人三沢、岡田の下僚と岡田夫婦の仲人家のお貞、岡田とお兼もここに挙げ得よう。

15、注6に同じ。

An Essay on *KŌJIN* of *Sōseki Natsume.*

Takashi ASADA